

# ことばの変化

## 第1節 意味変化

### 1 意味変化と多義語

語の意味は歴史的に変化しないものもあるが、本来の意味から派生して別の意味を生じることもある。これを「意味変化」という。

意味が変化した結果、新しい意味だけで用いられることもあるが、古くからの意味に加えて、新しい意味でも用

いられると、語の意味が広がり多義語となる(図5-1, 5-2)。

### 2 なぜ意味変化が起こるか

「うまい」は〈美味である〉という味覚を表す語であるが、これが「歌がうまい」「うまい具合に」というように用いられるのは、味覚に関しての満足感が別の対象に向けられたことによ

#### ■ 語史と語彙史

語の歴史(語史)を個別に記述する場合、語は音声形式と意味との結合したものであるから、音声面、すなわち語の形態に即して、その語形がどのように変化してきたかを考察する立場と、ある語の意味がどのように変化してきたかを考察する立場とがある。さらに、ある意味を表すことばとして、歴史的にどのような語が用いられたかを考察する立場もある。

また、語彙史では、ある意味分野にはどのような語彙があり、それが歴史的にどのように変化してきたか、それぞれの時代にどのような特徴があるかということなどを扱う。

#### ■ 意味変化の一要因

意味は使用範囲の拡大(縮小)による場合のほかにもさまざまなケースが考えられる。

たとえば、「おおげさ(大袈裟)」が〈誇張しているさま〉の意となるのは「おおけなし(おほけなし)」の語幹「おおけ」に接尾語「さ」が付いたものに由来する。「おおけなし」は〈身分・能力などから見て、態度や振る舞いが出過ぎているさま〉を表し、この「おおけなさ」と「おおげさ(大袈裟)」との音や意味の類似によって「大袈裟」が生じたのであろう。

このように、同音・類音の語や、意味が類似している語を介させる場合にも意味の変化が起こりやすい。

#### ■ 語義の「ゆれ」

文化庁では2008年3月に「国語に関する世論調査」を実施し、1975名から回答を得た。その中に「ことばの意味」に関する項目があり、「さわり」「煮詰まる」「憮然」などのことばを取りあげている。

本来の意味は、「さわり」は(ア)、「煮詰まる」は(イ)、「憮然」は(ア)である。

図5-2(84頁下段)を見ると、「煮詰まる」は年輩者に比べると、若い世代では本来の意味とは別の意味で解釈されていることがわかる。これは「煮詰まる」という語の意味が変化する兆しを示していると言える。

る。つまり〈味がうまい〉から〈歌がうまい〉〈事態がうまい〉というように、〈うまい〉と感ずる対象を広げて用いることが定着し、それによって、〈上手だ〉〈都合がいい〉という意味でも用いられて、多義化することになる。その使用範囲が本来の領域を逸脱して拡大(もしくは縮小)する際に意味変化が生じると言える。

ただ、意味が拡大したという意識はその当初において明確にあるわけではなく、使える範囲が広がったというだけである。しかし、同じような意味で、「上手だ」「好都合だ」など別の語が出現すると、対となる類義関係の語との間で、同一の語の内部で意味用法との異同が意識され、別の意味で用いるという自覚が生じることになる。

また、「おいしい」ということばが

新語として使われだすと、「うまい」との関係で「おいしい」が上品で丁寧なことばであると感じられるようになり、主として女性が用いることになった。すなわち、対となる存在によって初めて、ことばの意味が限定されてくるとい性質をもっているのである。概念的な意味だけではなく、語感やニュアンスなども意味の変化には含まれる。

### 3 意味変化のパターン

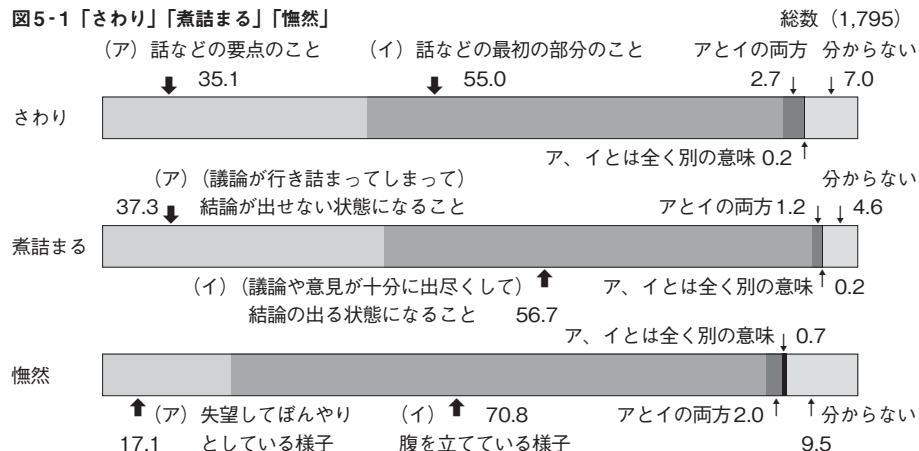
意味変化の主な類型を次に示す。

① 転移(ある事物に関して、その内在的性質や関係の及んだ事物などの意に転じて用いられる)

「口」〈手に持つもの〉→〈手札〉  
〈手で書いたもの〉→〈筆跡・書風〉

② 意味の類似(比喩的転用)

(1) 形態の類似



【出典】「平成19年度国語に関する世論調査」(文化庁、2008)をもとに作成